

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(基礎編)

第5回：自立した子どもに育てるためには

まずは自立の概念から押さえておきたいと思います。小学館のデジタル大辞泉では「1 他への従属から離れて独り立ちすること。他からの支配や助力を受けずに、存在すること。2 支えるものがなく、そのものだけで立っていること。」を自立の意味としています。

この意味するところを子育てのゴールとすることは良いかもしれませんが、ただ、恐らくは誰一人としてこのような自立を成し遂げている人間はどこにも居ないように思います。それは、私たちは「生きていくためには人とのつながりを欠かすことが出来ない存在」だからですし、また、そのつながりを通して様々な経験をし、学び、足りないところを補い、成長(自立)の階段を少しずつ上がっているわけだからです。また、この定義からすればそのまま障害を抱えている、あるいは病気を患っておられる方たちはもとより、“健常”と思われている人たちであってもいろいろな意味で“厄介な人やなあ”と言われながら陰で支えてくれる人がいることで何とか社会生活をする事が出来ている人たち(書いている私自身も含め)は沢山おられますので、その方たちの自立はあり得ないということにもなります。

そこで、自立を「一人ひとりが自らの“力”(顕在的能力+潜在的能力=残存能力)を活かすこと」とであると規定したいと思います。もちろん、一人ひとりの能力には差がありますので、生活や学習はもとより人間関係などで抱える様々な問題や課題を解決することが難しいようであれば、一人ひとりの能力不足の程度に応じて支援をすることが必要です。しかしながら、少なくとも一人ひとりが自身の持つ能力をフルに発揮することを自立と定義づけるならばその身体的・心理的・社会的状況に囚われることなく一人ひとりの自立について考えることが出来ますので、適切ではないかと思えます。

そのように考えた場合、子どもの自立を促すには、先ずは一人ひとりの子どもの“力”をできる限り客観的に評価することが不可欠となってきます。ところが、これがなかなか難しいことなんですね。それは、保護者自身、普段から自分に対してできる限り客観的に評価しようなんてことを考えないからですし、それにも関わらず一人ひとりの子どもに対する主観的な評価(好意・嫌悪)を持ってしまっているからですね。結果として、子どもの“力”を損なうような関わりをすることになってしまうこととなりますので、自立を促すことにはなりません。

どうでしょうか？保護者の皆さんはもとより、教育関係者を含め子どもたちを自立に導くことに携わるすべての人は、自己を客観的に評価するように努めませんか？

ただ、評価という言葉は、本来、禁句なんです。“評価”には“良い・悪い”を決めるという意味が含まれますので、通常、自己を客観的に見ようとした場合、見えてきたものを“良い面・点”と“悪い面・点”とに振り分けてしまうこととなります。しかも、多くの場合、“”悪い“面・点が多く(人によっては”良い“面・点が多くなるかもしれませんが)なり、その事実を直視してしまうこととなるため、客

観的に見る作業に取り組むのが嫌になり、途中でドロップアウトしてしまうことになります。

人間は神ではありませんので、両面(きれいな面と醜い面)を持ち合わせてこそ人間です。また、物事の意味はその環境・状況によっては、意味が逆転することも有りますので、“良い”とか“悪い”とかに振り分けたとしても、その価値基準に囚われる必要はありません。必要なことは、そのような面を持っていることを認識して日ごろから子どもに対する言動に気を付けることで、それに取り組み続けることが出来れば子どもの“力”を客観的に評価する準備体が整うのだと思います。

一人ひとりの子どもの持つ“力”によっては、例えばヘリコプターであったり、プロペラ機であったりジェット機であったり、はたまた NASA が打ち上げるロケットであったりと、違いはあると思いますし、飛び立つのに必要な燃料は子ども自身が自分で作り出すことが出来ます。それだけに、保護者は、子どもたちが自分の翼で飛び立っていけるように、またどこにでも飛んでいけるように、向かい風となりつつ、一人ひとりにあったエンジンを子どもに付けようとして欲しいものです。保護者の期待を押し付け、子どもが常にお尻を叩かれる(追い風になる)とか子どもに合わない大きすぎるエンジン(過度な期待)を付けさせようとする、子どもは墜落したり、空中分解をしてしまうことになりますからね。子どもの人生を台無しにしないように、くれぐれも気を付けたいものです。